
サチ子の日記 【モンスター・ドビー】

土堀 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サチ子の日記 【モンスター・ドビー】

【Nコード】

N4106T

【作者名】

土堀 友

【あらすじ】

サチ子は休暇で玄さんの住む海辺の町にやってきた。そこで正夫という青年に出会う。

海の魔物『ドビー』から正夫を救うサチ子の物語。

正夫

ドライブ日和である。サチ子は冬晴れの早朝、愛車のハンドルを握っていた。東名に乗って三時間、インターチェンジを降りて真つすぐ南に下り、その途中、峠の頂から小さな町と漁港を見る。

この町の西はずれにある港の沖合に、地元では『げんこつ岩』と呼ばれている岩場がある。釣りには格好のポイントであるこの岩場には、休日ともなるとクロダイ等の大物を狙って、釣りマニア達の舟がひしめき合って、集まってくる。

げんこつ岩を右に見ながら湾岸道路の信号を左折して、五百メートルほど港の入口側に入る。釣り舟専用の『船着き場』から少し走ったところに玄さんの店があり、玄さんは貸し舟の経営のほか、釣りの道具とか餌なども売っている。

店の前に玄さんが立っていた。

「玄さん、こんにちは。元気——」

「やあ、サチ子か。久しぶりだな、いつ来たんだ？」

玄さんは人懐っこく笑った。還暦を過ぎて、がっしりとした骨格であるが、肉が落ち、少し痩せたように見える。ここは静男の生まれ故郷でもあるが、八年前の海難事故で、玄さんの店が災害対策本部となった場所である。サチ子は取材で玄さんと知り合って、その時の縁で毎年一度はここに休暇にくる。

「さつき着いたばかりよ、明日までいるわ」

「漁火か？ 民宿の」

「そうよ、もう予約してあるの。おばさんも逢いたいって」

「ちょうど良かった、今晚俺の家でパーティがある。よかったらサチ子も来いよ」

「ありがとう、お邪魔するわ」

少し走って、サチ子は今日の宿である民宿漁火に着いた。民宿のおばさんはご立派な体格で、昨年より一回り太ったように見える。

この民宿は、食べ物が美味しいこともさることながら、岩場にこしらえた露天風呂がサチ子のお気に入りである。

「お婆さん、こんにちは。よろしく」

「いらっしやい、サツチャン。まゝ 一段と美人になって、さーさ、どうぞ・どうぞ」

お婆さんは荷物を受け取ると二階の東側の部屋へ案内してくれた。海の女は力持ちだ。窓からの景色は素晴らしい。青い海、白い砂浜や、溶け入るような入り江の山々、遠くには富士山がくっきりとその姿を映していた。

玄さんは四、五年前に奥様を亡くし一人暮らしである。娘さんも遠くに嫁いでおり、帰ってくるのは年に一度か二度。寂しいですなと、言ったら「いやー、そんなことは無い。地元の若い衆と毎日宴会さ」と笑っていた。サチ子はもう若くはないが、『独身の女が来る』と聞くと、男衆は妙に力が入るらしく、いつも女王様に祭り上げられる。今夜もそのような雰囲気の中、玄さんの家の二階は、飲めや、歌えやのドンチャン騒ぎとなった。

サチ子は玄さんの隣で鍋をつつく。取れ立て新鮮な白身の魚が味噌仕立てのスープの中で美味しそうに煮えている。五百ミリリットルの缶ビールを開け、男顔負けに飲んだ。話しが盛り上がり、大声になり、たばこにも火をつけた。若衆はカラオケで歌ったり、エロ話で盛り上がりたりしている。その一角で、意外と真面目にこの町の将来を熱く語り合っている若衆達がいる。玄さんも身体を傾けて、その若衆達の話を聞いていた。

その屈強な若者たちの中に、一人だけ体も華奢で声も小さく、見るからに気弱でおとなしそうな男がいた。玄さんは彼を『正夫』と呼んでいた。

若衆が正夫に話しかける。

「正夫、この町はもちろん漁業で食っていかなばならんが、観光も大事だ。民宿も増えているしな」

「観光で一番大事なことは何だろう」と、正夫もこたえる。

「安全だな。事故を起こしたら終わりだ。そんな話を聞いただけで、誰も寄りつかなくなる」

「そうだ。しかし、俺達の力だけでは無理だ。町も予算を付けてくれ」と、別の若衆も相槌を打った。

正夫は、「皆の気持ちは上に伝える。俺も頑張る」と、言った。どうも正夫は町役場に勤めているようだ。

「厄介なのは『げんこつ岩』だな」

「あそこは良い漁場だが、引きが強い」

「俺もやられた、きついぞ。南に一直線に引かれる。下手をするとそのまま湾の外にまで出てしまう」

その時、玄さんが体を振りながら話し始めた。

「皆も知^{みんな}っている神引きの話だが、ほんとの神引きは違う。

八年前の友吉さんのことさ。海の魔物『ドビー』の仕業だ」

玄さんはグビッとビールを飲んだ。

友吉さんが助かったのは奇跡だった。友吉さんの証言、あれでドビーの手口がわかったと、玄さんは目力を込めて語った。どうも、げんこつ岩の辺りにはドビーという魔物が潜んでいるらしい。皆はドビーが悪さをするのではないかと、心配しているのだ。

「このことは、公開すべきだ」

若衆の一人が言った。

「ばかな、そんなことが知れたら釣り客が来なくなる」

リーダ格の若衆が、苦々しく酒を飲んだ。

「人命が第一ではないのか？」

「俺たちの暮らしはどうなる？ 頭を冷やせ」

「そうだ、身が第一さ。都合の悪いことは、役所の責任にすればいい」

正夫はどうだ、と聞かれ正夫は口ごもった。

「俺には毎日浜に出て皆の無事を祈ることしかできない」と、玄さんがかばうように言った。そして……

「皆も注意して海を見ていてくれ」と、その場を見渡し……

「異変が起きたらすぐ知らせてくれ。おれの家には防災局と直結したホットラインがある。正夫が、課長さんと一緒に県にかけ合ってくれて、ようやく整備された。これがあれば鬼に金棒だ。何でもそうだが、早ければ早いほど助かる可能性が高くなるでよ」と、その場をつくろった。答えの出ない結論は先送りである。

海難事故調査委員会の公式発表では、『夜釣りに出た友吉さんは、神引きに襲われ南に流された。外洋に出てから黒潮に乗って東に流され、外洋航路の外国船に救助された』と、いうものであった。

サチ子の取材では、『突然海が時化、友吉さんは高波にのみ込まれて気を失った。気が付いた時には外洋に漂っていて、幸運にも外国船に救助された。ドビーは、遭難者が発見されないように救助隊には南に流されたと見せかけて、実は東に流した。外国船に救助されたのは全くの偶然であった』と、いうものだった。

事実誤認がある、ということ、サチ子のレポートはボツになった。しかし玄さんは、サチ子のレポートを見て「これが正しい」と、言った。

のん兵衛達の宴会は腰が長い、このまま延々と続く気配である。

サチ子は適当に切り上げて民宿に戻った。

時計を見ると既に十二時を回っている。真下にある露天風呂を二階から覗いてみるが、辺りは真っ暗で人の気配は無い。そろそろ行くには、よいタイミングである。岩場の陰で服を脱ぎ、お風呂に入る。ほどよい湯加減に、つい「フイー」と声が出て、サチ子は気持ちよく肩にお湯をかける。ドドーン・ザザー、ドドーン・ザザーと、打ちては引いて、引いては打つる波の音に、暫し心を沖にあずけるのであった。

――満天の星屑。さてさて、人は亡くなると星になるって聞くけど、海の男達は母なる海に帰るんだって。場所はマルセイユ、

ノートルダム・ド・ラ・ガルド（守護聖人）教会。山頂の教会の屋根には金色に輝く聖母マリア像が建っていて、聖母マリアは海難事故などの魔物から海の男達を守っているそう。無事帰還した漁師も、そして未帰還者も、人は皆、救いを求めて敬虔な祈りを捧げているという。この海はその地中海にまで続いている。美しい、亡くなった人々の魂が輝いているみたいだ――

サチ子は、ハツとして我に帰った。

人の気配は無い。しかし、確かに黒い影が動いた。サチ子は暗闇に目を凝らす。すると、男がいた。サチ子の左前方にある岩場の陰で、男は静かに背を向け、遠く沖を眺めている。

本能的に危険を感じ、この場から立ち去ることを決意したサチ子は、男に気付かれぬように、岩伝いにソロソロと湯をかき分け、出口付近までやって来た。ここまですれば走って逃げることもできるし、助けを求めることもできる。サチ子は少し安心して、湯ぶねから立ち上がり様、振り返りチラッと、その男を見た。

その瞬間、恐怖のあまりサチ子の体は凍りつき、声も出せずに動けなくなった。背を向けていたはずの男は、こちらを向いてサチ子を凝視していたのである。真つ黒な顔の輪郭は周囲の闇に溶け込んで、その表情は窺^{うかが}い知れない。ヘビのように血走^なった冷血な目が、動けなくなったサチ子の体を、いたぶるように舐^なめずり廻している。サチ子は気を失いそうになりながら、小さく「マリア様」と、口にした。

その瞬間、男はたじろぎ、サチ子に背を向けて海に目を移した。一瞬のスキを衝いて、サチ子は地を蹴って転がるようにその場を逃れ、宿に戻った。

二階の窓からそつと露天風呂を覗いてみたが、人の気配は無かった。湯疲れしたサチ子はそのまま布団をかぶったが、眠れぬ一夜であった。

浜の朝は早い、ポンポンポンという焼玉エンジンの音を響かせて、

一番船・二番船と出漁していく。慌ただしくも、活気にあふれた朝の風景、浜の一日が始まった。

玄さんが、今朝も早くから海を見ている。

「おはよう、玄さん。昨日はご馳走様。いつも海を見ているのね、何を考えているの？」

「その時によって違うが、今は東の海水浴場のことさ。ずっと昔、子供のころの東の海水浴場……」

魔法のように、夏の間にだけ開く不思議な駅だったな――。」

玄さんはボソボソと話し始めた。

そこは竜宮城のようなところだった。

ところが、いつの頃からか、この海辺に魔物『ドビー』が棲みついて、知らぬ間に長く続く白い砂浜はなくなった。遠浅だった海は、恐ろしいほど急深になって、浜はゴミだらけとなり、海には重油の塊が浮かぶようになった。工場の廃水が流れ込んであんなに綺麗だった水は濁ってしまったと、……。

「すべてドビーの仕業。皆が気付いた時は既に遅かった。東の海は海水浴場としては使い物にならなくなっていたのさ。」

漁師になって、二十歳過ぎたころ、南の海に泳ぎに行ったことがあるんだ。

海の色を見てハッとしたね。失われた東の海岸の透明な海がそこにあったんだ。子供のころの記憶がいっぺんに噴出してきてね。

あれは懐かしい故郷に帰って来たようだったね。

それから南の海には何度も遊びに行ったよ、夏が来るとね。

俺の青春だったからさ、南の海は。

もう長いこと行ってもみないが、あの碧い海は、いまでもきれいだろうな。……」

玄さんは海を見ながらひとりで思い出に浸ってしまった。

サチ子は仕方がないので、玄さんと別れ、朝食で同席した老夫婦とお風呂に。

「おばさん、水着貸して」

「はいよ、サッチャンのマイ水着」

「エヘヘ、マイ水着なんてあり？ 朝の露天風呂はたまらない。小

原庄助さん・女版」

「おばあさん達はどちらからお見えですか？」

「鎌倉からですよ、サチ子さんもジモチ？」

「エ、……」

「ここの湯は痔に良く効くそうですよ」

「いや、わたしは、まだ、そちらは大丈夫です、エーホント」

「そうね、でも痔に効く位ですからお肌にもよろしいでしょうね――」

「ウーム、黄門様と美顔エステのコラボレーションか、チョツとね」
お風呂から出たサチ子は、お肌のケアも終わり、浜に出てみると、玄さんがまたもや沖を眺めていた。

昨夜の事件を話そうか迷ったが、結局言わず仕舞いとなった。サチ子は玄さんの横に並び、玄さんと同じように両手を腰に当てて沖を眺めた。

「サチ、正面におむすびを小さくしたような岩があるだろ、げんこつ岩だ。そこから指三本右方向に舟が浮かんでいる。黒ゴマのように見えるけど、あれはうちの舟だ。銀シャリに黒ゴマが一粒って感じだな」

「エー、どこどこ、ア、あそこ？ ほんと、でも玄さんの舟だってどうしてわかるの？」

「舟は皆同じような作りだが、毎日見ていると微妙に違いが解るんだ。理屈じゃあないね、自分の目を信じるってことかな。見てごらん、三時の方向、ズーと手前の舟、船尾で船外機の舵を取っているのが正夫だ」

「あの舟ね、人が三人乗っているわ。正夫さん、お仕事なの？」

「いや、奴は公務員だ。趣味で乗っている。正夫の親父さんはカツオの一本釣り漁船に乗っていたが、三十年ほど前三陸沖で遭難した。

いまだに帰ってこない」

「そーなんだ、正夫さんお気の毒ね」

「正夫の母さんは女手一つで正夫を育てた。正夫が親父と同じ船乗りになると言った時、泣いて反対したよ」

「わかるわー、お母さんの気持ち。わたしの母も、何だ・かんだと言ってくれど、わたしの事想ってくれているもの」

「結局、俺が町長に頼みこんで町役場で使って貰う事になって、それから、あいつも真面目に働いている。どうだい、サッチャン」

「え？ どうって何が」

「正夫のことさ、聞いて無かったのか？ お嫁さん、捜しているんだ」

「えー、いや、なに、ウン、そうだよ、エー・待って、わたし、だめよ」

「何でさ、いい人、いるんかい？」

「いや、ウン、いやいやそんなこと無いけど。でも、わたし、擦れっ枯らしだから」

「そんなことはない、サチはいい娘だ。ま、いいさ。今すぐで無くても」

サチ子は両手にサンダルをブラブラさせて、裸足になって宿に帰った。砂に足が埋まる。歩きたびに足裏の砂がジャリジャリと鳴って、もぞがゆい愉快的気分になった。そして、昼まで二階から飽きること無く海を眺めていた。げんこつ岩の辺りにも、小さな舟が思い思いに釣り糸を垂れている。

「サッチャン、お昼よ。下りといで」

お婆さんの甲高い声でサチ子は階下に下りた。今日のお昼はお刺身ステーキ、それと天ぷらがメインの磯料理。こんなには食べられないと思ったが、案外ペロリと平らげてしまった。

午後、お昼寝をしてソロソロと帰り支度を始めたが――
へそうだ、玄さんにあいさつしてから帰ろう

サチ子は、みやげ物を買いながら玄さんの店を再び訪れた。

店には正夫もいた。玄さんは店の中から手招きして、「正夫、サチ子が来たぞ、コーヒでも入れろや。俺、ちよっくら用があるで」と、言って出て行った。サチ子は、こんにちとは笑顔であいさつし、海が見える窓辺に腰かけ、正夫のコーヒをがちそうになった。モカ系の甘口、強いて言えばサチ子の好みではないが、でもおいしく頂いた。

共通の話題も無く若干気まずい雰囲気。

正夫は下を向いてモジモジしている。サチ子はこのような状況下での演技が下手で自己嫌悪に陥る事がある。

〈コホン〉

「正夫さんの趣味は海釣りですか？」

「ええ、マー。でも本当はギター、フォークですよ。海を見ていると自然に詩が湧いてきて、シンガーソングライターってとこかな」

「正夫さんの曲、聞いてみたいな」

「ほんと、CD焼いたの持っているから一枚プレゼントするよ」

正夫はカバンの中から一枚のCDを取りだして、紙袋に大切にうに入れて、サチ子に渡した。

「サチ子さんの趣味は？」

〈やはり。そう来たか、ヤブヘビだった。わたしは無芸大食、早メシ、早グソ、おっとっと、いけない。母のメッセージ『サチ子さん、上品に、エレガントに、お頼たのもうします。』は、いい、それでは行ってみよう、ヨーイスタート・カチンコ〉

「わたしはジャーナリストよ、特大スクープを世界に発信するのが夢なの」

「僕の曲、世界中に流れるといいな、夢なんです」

「そーね、お互い頑張ろ。あー、もう帰らなくっちゃ」

サチ子はおいしかったコーヒのお礼を言って外に出た。

入口付近でガタンと音がして玄さんが砂浜を走って行く。

〈あいつ、わたし達の話、盗み聞きしていたな〉

玄さんは波打ち際で振り返ると笑顔で手を振った。
サチ子も大きく手を振って、「又来ます。さよなら」と、言った。

第一章 正夫という男 了

嵐

海岸からなだらかに続く長い坂道を登って山の中腹に出ると、そこには小さな集落があり、急な斜面を段々に切り取ったところに石垣で囲った正夫の家がある。

急坂を登る街並みや、海から山肌を駆け上がる風、グラスの中に差し込む暖かな光などは、南フランスの地中海沿いに見た小さな要塞のような港町に良く似ている。

この山頂付近にある古いお寺には、正夫の父が眠っている墓があり、正夫は幼い時から母と墓参りをしていた。代々続くこの墓は、梶取一族の分家筋にあたる墓で、正夫はその末裔^{まつえい}であった。

墓参りの帰り道、母はいつも網元の作蔵の家へ寄った。母はそこで、保険のような金品をいただいて、正夫は母の用が済むまで末男と庭で遊んでいた。末男は上柳家の三男四女の末っ子で、正夫とは同級であった。そんな関係で、末男は大学を出るとそのまま都会の人となったが、盆や、正月に帰省するときには、きまって正夫の家に遊びに来るのである。

今年の夏休み前のことである。

お盆に帰省するので帰ったら釣りに行こうと、末男からメールが入った。

正夫は釣りに出る時はいつも玄さんの舟を使った。夜釣りにも度々出かけ、海には慣れていた。

正夫は玄さんの店を訪ねた。

玄さんはいつものように店の前に立ち、海を見ている。

「オウ、正夫か。エッ今度の土曜日？ 予約は一組だな。いいよ、空いているから。一〇二号を使いな」

玄さんもわが子のように、人一倍正夫の面倒を見ている。まさか正夫が嵐に遭い遭難するとは、この時、夢にも思っていなかった。

嵐2

玄さんもわが子の様に、人一倍正夫の面倒を見ている。まさか正夫が嵐に遭い遭難するとは、この時、夢にも思っていなかった。

「ありがとう玄さん。今の時期、げんこつ岩の付近ではクロダイは無理かなー」

「そうだなー。無理という事もないが、どうだかなー。夜釣りならタチウオだな。これならはずさないと思うよ」

「タチウオか、これ面白くないんだよね。仕掛けが面倒だし」

「フム、救命胴衣ライフジャケットは勿論だが、ウェットスーツも着た方がいいぞ。

末男も一緒なんだろう、夜は冷えるからな」

「玄さん、チョツとオーバーじゃない？ たかが夜釣りだよ。六時ごろに出て十二時には戻ってくるからさ」

「なーにお前、海や山は用心に越した事は無い。いざとなったら紙一重ってこともあるしな」

正夫は玄さんの用心深いところに辟易していたが、末男に相談してみると、意外に「玄さんが言うことだから」と、当日は重装備となった。

約束の時間、二人が船着き場に着くと既に第一グループが準備をしていた。

このグループは年のころ五十代後半のおじさん達四人組で、正夫達を見ると「オッ、南極探検か」と冷やかし、一〇一号の舟に乗って沖へ出て行った。正夫は憮然としたが、久しぶりの末男との夜釣りである。末男の気分を害さないようにと気を使い、努めて明るく振舞った。

玄さんは一〇二号の舟に正夫達を乗せると係留していた綱を解きながら「気を付けてな、無理すんなよ。うねりが出たら帰って来い、

どうせ釣れないから」と、言った。そして夜食用にと、おにぎりやおかずの入ったクーラボックスを手渡し、「昨晚のすき焼きの残りに肉を足しておいたからうまいぞ」と笑った。正夫達も「わかったよ、玄さん。みやげ待っていてね」と手を振って船外機のエンジンを回し、沖に漕ぎ出した。すぐに日が沈んで辺りは暗くなったが、海は穏やかに風いで、絶好の釣り日和であった。

嵐3

げんこつ岩の周辺で竿をいれるとタチウオが食いついてきた、今夜はいつもより良く釣れる。二人はクロダイを狙ってげんこつ岩に上陸することにした。げんこつ岩には既に先ほどのおじさん達が乗り込んでいて、「また釣れた」、「俺もだ」と、歓声を上げている。舟を付ける所は決まっていたが、不慣れなおじさん達はお行儀悪く『二番船着き場』に舟を繋いでいた。正夫は止むを得ず、その手前の『一番船着き場』へ一〇二号を繋いで岩場に移った。ここでも珍しく良く釣れた。まるで沖から追われてきた魚たちが、げんこつ岩に飛び乗るような勢いで、竿を入れるたびに獲物が掛った。

しばらくして正夫はうねりが大きくなってきた事に気が付いた。

「末男、そろそろ帰ろうか。波が出てきたみたい」

「エー、もったいないよ。おじさん達、まだ釣っているぜ」

正夫は先ほどのおじさん達に目をやった。皆、釣れた・釣れたと大はしゃぎで、帰る気配はない。正夫もこのまま帰るのは、少し惜しい気がした。

海はだんだんと荒れてきた。沖では白い三角波が立ち始め、沖から寄せる波がげんこつ岩に当たり、大きく水しぶきを上げた。

「プアー、これはたまらん」。誰かが声を上げた。海が時化始め、不吉な予感が皆の心を過ぎよった。運悪くポツリ・ポツリと雨も降りだし、皆「これはいかん。帰るとするか」と、誰ともなく帰り支度を始めたが、雨は急に大粒の本格的なものとなり、強い風が吹いて、あっという間に嵐となった。

雷神が肩に担ぐ風袋から吹き出す風は逆巻き、光る稲妻に天は裂け、波はおおしく渦巻いた。

おじさん達は大急ぎで『一番船着き場』から舟に乗り、陸へ向か

って漕ぎ出した。正夫達も『二番船着き場』から舟に乗り移ったところで、大波が押し寄せてきた。

海は、ポツカリと大きな口を開け、あっという間におじさん達の舟を飲み込んだかに見えた。

次の瞬間、浮き上がった舟を後ろから五メートルもの大波が、追いかけるようにのしかかってきて、舟はもろくも海中に沈んだ。

正夫は必死に大波をかわすと「これはいかん」と舟を戻し、海に投げ出されたおじさん達を救助しようとした。しかし、波は深く大きくうねり、思うように舟を動かすことができない。

ひとりが岩場に辿り着いてへばり付いた。次の大波が幸運にも他の釣り人を岩場に運んだ。一人、また一人と岩場にかじり付いていく。

嵐4

波が引いた、正夫達の舟は真逆さまに奈落の底に落ちて行く。その嵐の中で正夫は声を聞いた。『重心を後ろに移せ、船尾に移動しろ』。正夫達は船尾に移り「南無観世音菩薩」と叫んだ。舟は棒立ちとなって空に飛び出し、次に山のように大きな波が舟の後ろから襲いかかる。『追い波だ、重心を前に移せ。船首に移動しろ』、正夫達は前に移った。舟は大波の頂上に乗ってもものすごい勢いで斜めに滑った。

正夫達の舟は、木の葉のように揺れ、嵐の中を彷徨った。

「正夫、もたんど、このままでは持たん。早く陸に向かって漕ぎだそう」

「いや、末男、無理だ。引き潮が強い、沖へ流されていく。戻れない」

「しかし、このままでは波をかわし切れん。沈むぞ」

二人の声は、雨と波の音にかき消され各々が勝手に叫んでいる。

「陸へ向かえば追い波がかぶってくる、沖へ出よう。波を突っ切るぞ」

「正夫、それでは漂流してしまう、遭難してしまうぞ」

「沈むよりましだ。とにかくこの場をかわそう、次の事はそれからだ」

大波は二の手、三の手となって次々と正夫達を襲い、波をかぶるたびに今度こそはダメかと何度も思った。

ヒューヒューという不気味な風の谷間から再び声が聞こえてくる。

『右だ、おもーかーじ面舵とーりかーじいっぱい、波をかわしたら左に舵をとれ、左だ。取り舵、そうだ、よーそろー、うまいぞ』。

正夫は舵柄をしっかりと握り、舵を左舷側に目いっぱい切った。そしてエンジンを全開にした。船首は右を向き大波をかわした。正夫はそのタイミングで舵を右舷側に切った。船首は左を向いて泳ぐ

ように波をかき分け、舟はジグザグに波をかわしながら沖へと進んだ。

さすが、梶取家の血筋。梶取正夫の操船は神がかり的に素晴らしく、見事な舵さばきであった。

嵐5

やがて雨は小降りとなり、波も穏やかになってきた。暗闇の中で正夫は『乗り切った』と確信した、と同時に耐えきれない疲労感に襲われた。末男は舟の舳先へさきにもたれ掛りピクリとも動かない。正夫も何時しか意識が遠のいていき、舵柄を握ったまま深い眠りに落ちた。

どの位の時間が経ったのだろうか、正夫は夢を見ていた。いや、夢だと思ってそこに寝ていた。そこには若い男が立っていて、何も言わず正夫の顔を食い入るように覗きこんでいる。その瞳は暖かく、慈愛に満ち溢れていた。正夫はこの男は父であると思った。

覚醒した意識が、また深い闇の中に溶け込んでいき、意識がまどろんでいく。そのようなことを何度か繰り返しているうちに、末男の声で目が覚めた。既に辺りは明るくなっていたのである。

「正夫、ヘリだ。きっと俺達を探している。早く起きろ」

北西の方角に黒い点が見える。その方向からヘリのエンジン音が聞こえてくる。正夫と末男は大声で助けを叫び、必死に手を振った。しかし、ヘリは引き返してしまった。

黒い点が消え、ヘリのエンジン音も消えた。

希望は上空の彼方へ吸い込まれるように消え、再び静寂な世界に戻った。

この静けさは、先ほど以上に侘びしく波の音ひとつ聞こえない。この位置では左に富士山、右手には湾の奥深く見慣れた半島の連山が、かすみたなびいている筈だが、それが見えない。誠に心寂しい限りである。

海は蒼あおく水平線などはない。果てしなく続くその蒼さは湾曲した球体となって正夫の見る世界は海も空も全ては蒼く塗りつぶされている。

発狂しそうな静寂の中で、末男も、正夫も生きる気力を失いかけ

ていた。四辺は知らず内に視界が妨げられ、発生した乳白色のガスが舟を覆ったのである。

「正夫、ここは何処だ。何も見えん、この世の果てか、それともあの世か」

末男は幻想的な景色に自分の居場所が分からなくなっていた。状況は正夫も同様で、桃源郷に居るようでもあり、何とも力が入らない。生きているのか、死んでしまったのか確かめる手立ても無く、無気力に波間を漂っている。

嵐6

末男は幻想的な景色に自分の居場所が分からなくなっていた。状況は正夫も同様で、桃源郷に居るようでもあり、何とも力が入らない。生きているのか、死んでしまったのか確かめる手立ても無く、無気力に波間を漂っている。

「正夫、死後の世界とは、このような所かも知れんな」

正夫も頷いた。生きている証とは何だ。正夫は体から気だるく抜けていく気力をどうする事も出来ず、だらりと舵柄に身を預けていた。

もう死んでしまったのかも知れない。

そのように思うと正夫はとても悲しくなった。

生きていたならば、もっと親孝行もしたかった。

素敵な恋もしたかった。

何よりも自分の人生に結果を出したかった。

全ての事が中途半端な事となって、この世を去るということとは、死んでも死にきれない。ここで、この世の未練を断ち切るなどできなかった。生きている時の、何でもなかった事が、今では手の届かない大切な宝物のように思えたのである。

「きつと俺達、助かるさ」

末男の声を背中に聞いた。しかし、ガスはさらにその濃度を増して、全くの視界不良となった。目の前のものですら、乳白色の無意味な空間と化した。

時が経つにつれ、正夫の意識はもうろうとして、幻覚が表れてきた。

目の前の玄さんが、寿司を食いながら話しかける……

「いいか正夫、こんな時は観世音菩薩に祈るんだ」

「玄さん、マリア様ではないの？」

「あ、そう？ あの時のことか ……」

玄さんの話は意味不明、何の脈絡もない。

あの時とは ……？

「その日の海水浴場はとても混んでいて、所謂イモゴジの状態だった。俺は浜辺から一メートルほどの、水深が約三十センチの所で泳いでいた。」……

玄さんは子供のときのことを酒を飲みながら

「今でも不思議でならねえのさ」と、言って首をかしげた。

つまり……

波が来るたびに起こる歓声やざわめきのなかで、ふと砂浜に目をやると、日傘を差してジーと玄さんを見つめている婦人がいたという。

その婦人は、鰐広つばひろの黒い帽子を被り、サングラスに紺のワンピースの水着を身に着けていた。

ふくよかな胸、健康そうに張った腰、小学生だった玄さんは、その美しい婦人をウットリと眺めていた。

すると突然、その婦人はとても慌てて玄さんに向かって走り寄って来たというのだ。

玄さんはその迫力にたじろいたが、その婦人は玄さんを押し退けて、玄さんの横から海中に沈んでいた小さな女の子をすくい助け、抱き寄せたのである。

その婦人は、女の子の母親であり、その子が水浴びをしている間、日傘を差して見守っていたのであろう。その子が溺れて海中に沈んだので、慌てて助けに来たのだ。玄さんはとっさにそのように理解した。

ただ、不思議に思うことは、当時現場には身動きも出来ないほど人がいて、その中には子供だけではなく大人もいたはずである。

それなのに、玄さんも含めてその女の子が溺れたことに誰も気が付かなかった。水に沈んだことも、誰も知らなかったということが

……

「今でも不思議に思えてならない。

母親が気付かなければ、女の子はあの時、命を落としていただろう。女の子を抱いたその姿は、聖母マリアのようだった」

玄さんはそう言って空を仰いだ。

「婦人は水から上がりはな、振り返り俺を見た。いや、正確には『俺の足元』だな。その時、足元が急に冷たくなり、白いモヤーとしたものが沖の深みに潜って行くのが見えたんだよ。あれはドビーだったかもしれない」……

海の底からジーと正夫を見ている黒い物体があった。

「正夫、気をつけろ」

正夫は、ドビーが近くにいると感じた。

生還

第三章 生還

携帯電話が鳴った。時計は日曜日の午前三時を指している。

「サチ子、起きろ。海難事故発生、現場は玄さんの海だ。今回は嫌な予感がするのでカメラマンには加瀬君をつける。取材車両が向かっているでそのまま現場に急行してくれ、情報は逐次入れる。気を付けてな」

「はい、了解しました」

サチ子はデスクの話を聞きながら身支度を整えていた。ジーゼルエンジンの音が聞こえる。窓に近づきカーテンをそっと開けて外を覗く。見ると、取材車両が横付けされ加瀬君の姿が現れた。「はい」。彼は、お寺の息子で法力があるからと、カメラの腕はいまいちだが、今回のように危険な現場を専門に担当している。

「ピンポン。サチ子さん起きていますか？ 迎えに来ました」

「まって、すぐ行くわ」

サチ子は手早く化粧を済ませ、髪を後ろに結んで飛び出した。

東名を飛ばせば、午前六時前後には現場に到着できる。サチ子は加瀬君の隣で今までの状況説明を受けた。

前日土曜日の午後十一時頃のことであった。

釣り舟一〇二号から海難救助信号が発信された。

「しまった、油断した。まさか正夫達が」

うたた寝をしていた玄さんは飛び起きて唸った。舟が転覆すると救難信号が自動発信される仕組みになっている。浜に出てみると、いつの間にか雨は本降りとなり風が出て海は^{おおしけ}大時化となっていた。玄さんは天候の急変に気付くのが遅れた。

役所の対応は素早く、一時間も経たぬ内に玄さんの店が災害対策

本部となった。知らせを聞いた関係者も集まってきて、その中には作蔵や正夫の母もいた。

対策本部では、悪天候の中での搜索は二次災害の恐れがあるということで、天候が回復する翌朝の日の出から、搜索活動を開始することとし、当面は情報収集に全力を挙げることとなった。

目の前に見えるげんこつ岩に取り残された釣り人の家族達は、「海に落ちたら終わりだ、今すぐ救出してくれ」と、懇願したが救助隊は動かず、朝まで頑張って生存している事を祈るしかなかった。

作蔵の考えは対策本部と真っ向から対立していた。

生還2

作蔵の考えは対策本部と真っ向から対立していた。

「舟が転覆した以上一刻の猶予も出来ねえ、末男達が舟につかまっている内に助けなければ手遅れになる」

「作蔵、今船を出すのは無理だ」

「玄さん、正夫の親父を救えなかったのはあんたの弱気な判断が原因だった。俺は違うぞ」

むかし、一本釣りのかつお漁船が三陸沖で遭難した事故があった。作蔵と玄さんはその時の数少ない生還者であった。

「板子一枚下は地獄だ。そのことはお前も良く知っている筈だ、俺は最善を尽くした。三十年も前の話ではないか、俺は正夫の父親代わりとなって償いもしてきた。作蔵、それでもまだ俺を責めるのか。神の許しも仏の慈悲も無いのか」

「そんなことは言っていない。玄さん、二次災害を恐れているのは俺じゃない、役所の人間だ。やつらは自分に責任がかぶってこなければそれでいい。末男の生命は二の次だ」

「そんなことは無い。第一この時化では満足に搜索する事が出来ないではないか」

「玄さん、舟は転覆しているんだろ。なら、迷うことはねえ、俺は行くぞ。皆の衆、状況はご覧のとおりだ。俺に命を預けてくれる船は一緒に出てくれ、お頼^{たの}申す」

場内はウォーという掛け声と異様な熱気に包まれて、対策本部の役人たちでは作蔵の行動を制止することが出来ない。作蔵の船『興運丸』を先頭に命知らずの漁師たちは大時化の海へと次々に出港して行った。

「げんこつ岩から南へ一キロメートルの地点で転覆している一〇二号を発見した。末男と正夫の姿は見えない、行方不明だ。

一〇二号のクローラーボックスを発見した」

興運丸からは悲痛な無線が入ってくる。

「末男達はさらに南に流された模様、搜索の範囲を広げるが手が足りない。後詰の船を応援に寄こしてくれ」

興運丸からの要請に対策本部長は顔面蒼白になりながらも指示を出した。

「了解と言え、準備が整い次第出港すると伝えよ。但し、船は出さな。日の出まで何としても時を稼げ。本庁連絡係りはこの事を一字一句漏らさず本庁に報告せよ。よいか、誤るでないぞ」

夜は白々と明けてきて、砂浜に立つ玄さんは沖に向かって叫んでいた。

「ドビー、出てこい。お前の仕業である事はわかっている」

墨汁を流したような空の一角から玄さんの耳に届く魔物、ドビーの声があった。

「久しぶりだな玄、いやさ玄治。よもやあの時の取引を忘れた訳では無かろうな。順番を一人ずらすことにお前は同意したはずだ。それでお前の寿命は三十年延びた、そろそろ限界だ。お前の命を貰いに来たぜ」

生還3

『正夫の父と順番を入れ替える』という、玄さんには思い出したい魔物ドビーと交わした忌まわしい一つの約束があった。

「海に落ちた男がどうなるか。玄治、お前も知らぬはずがない」

「やめろ、たくさんだそんな話は。取引しよう、お前にとって都合のよい話だ。よく聞け、もう十分だ、俺を殺せ。それでいいだろう、俺も逃げない。ただし、正夫の命は助けてくれ。どうだ、お前にとって損の無い話だろう」

「フム、検討に値する良いアイデアだ。頭の悪い玄にしてはよく考えたものだ。しかし、ワシはもっと良い案を持っているぞ。玄、お前の命は頂戴しよう、約束だからな。正夫もだ、どうだ。さらにもう一人頂くこととしよう。これでよい」

「何、もう一人？ 誰だ！ それは」

「サチ子だ。以前露天風呂であの娘を見た事がある、ワシの嫁にしよう。そして永遠の生命を吹き込んであげよう、私からの愛の証しとして。そして永遠に愛し合うのだ」

「だめだ、そんな事が許されるはずが無い。お願いだ、それだけは諦めてくれ」

「玄、何千年と一人で生きている寂しさはお前にはわかるまい。生命は有限であるが故に尊いものだ、永遠の生命は虚^{むな}しい。ワシにもよき伴侶を得る権利がある、邪魔をするとはひどいぞ」

玄さんはヘタヘタと腰を抜かし、その場にしゃがみ込んでしまった。そして両手で砂を掻きあげて、オイオイと泣きだした。

早朝、サチ子たちの車は砂塵を巻上げて対策本部前に到着した。

「夜が明けた。風向きが変わったぞ、救助隊は準備して待機せよ」

本部長の命令がマイクから流れる、現場では警察官や消防レスキュー隊が慌ただしく動き回っている。サチ子は行き交う人の波の中

に玄さんの姿を目で追った。玄さんは本部の中に見ることは出来ず、少し離れた砂浜にうずくまっていた。サチ子は「玄さん」と声を掛け走り寄った。振り向いた玄さんの顔は砂だらけで、涙の後や鼻水の後に砂がこびりついていた。瞳は虚ろに空をさまよい、明らかに常人のそれとは異なっていた。へ玄さん、何があったの、サチ子はその場に立ち尽くしてしまった。

生還4

「サチ子さん、げんこつ岩での救助活動が始まります。五名のレスキュー隊員が決死隊を編成して、それをバックアップするサポーター二十名とげんこつ岩に向かうそうです」

現場では、隊員が乗り込む救助船が手配され、ボンベを背負ったレスキュー隊員が、水中眼鏡を頭にかぶって救助の打ち合わせを始めている。

「私たちは取材用ヘリでげんこつ岩上空を飛びます。私がカメラを回しますのでサチ子さんはマイクを取ってください、デスクから実況中継せよとの命令です。取材ヘリは既に地方新聞社の屋上ヘリポートに待機しています。ここから十五分かかります、急いでください」

加瀬君の声に我に返ったサチ子は車に向かって走り出そうとした。「サチ子」と呼ぶ玄さんの声に振り返ると、よろよろと立ちあがった玄さんは、サチ子の手を握ると「東だ、正夫は東の海上を漂っている。これで見つけてくれ」と、言って首から下げていたドイツ製の古い双眼鏡を外し、その場にへたり込んでしまった。

サチ子は口を開けたが声が出ない。〈分かったわ、やってみる〉と、玄さんの目を見つめるのが精一杯であった。

「サチ子さん、急いでください。何やってんですか」

加瀬君の苛立^{いらだ}つ声に急かされてサチ子は車に飛び乗った。タイヤを軋^{きし}ませて車は急発進し、ヘリポートに向かった。

程なくして新聞社に到着し、屋上に上がるとヘリはプロペラを回転させ何時でも飛び立てる状態で待機していた。

「ごめん、遅くなりました」加瀬君が頭を下げてお愛想したが、ヘリパイロットは『チッ』と舌打ちして「遅い」とだけ無表情に呟いた。サチ子達が乗り込むと、しびれを切らしたかのようにヘリは荒っぽく大空に舞い上がった。

「東へ飛んで、正夫を探しに行くの」

「サチ子さん、それはマズイ」

加瀬君の顔が蒼くなった。

パイロットは正面を見据えたまま、「東へ飛ぶ事はフライトプランに入っていない、ルート変更の許可が必要だ」と、忙^{せわ}しく計器類をみている。

サチ子は「言う事を聞きなさい」と、叫んで後ろからパイロットの首を羽交い絞めにした。機は左右に大きくローリングして失速しそうになった。

加瀬君が慌ててサチ子を引き剥がし「お願いです、言う通りにしてください。墜落してしまう」とパイロットを拜んだ。

「全ての責任をサチ子さんが取ると言うのであれば止むを得ません。但し、フリーフライトは燃料の関係で十五分しか飛べません、それでよろしいか」

サチ子は「OK」と大声を張り上げた。

パイロットは渋々進路を東へと変更した。

朝日が輝く東の海原は、宝石を散りばめたように水平線の彼方へと続く。

サチ子は双眼鏡で海面をくまなく探すが光が反射して搜索は困難を極めた。

少し霧が出てきた。

まれにはあるが、早朝では、時として太陽が射るオレンジ色の^{ひかりや}光矢は、海面から立ち昇る水蒸気で出来た葦の壁に絡め取られ、四辺一面は段々と乳白色の霧に包まれることがある。

濃霧である。早く見つけねばと尚も深く眺めいると、光の糸が小さな雲に遮られ、海面がすこし浮き出たかに見える。

へみつけた

東のはるか海上に黒い点が見える。

「銀シャリに黒ゴマが一粒、見つけたわ」と、サチ子は叫んだ。

その瞬間、機は大きく左に旋回しヘリポートに向かって帰り始め

た。

「何故引き返すの？ もっと近付いてちょうだい」

「時間です。帰還しないと燃料が持たない」

「予備タンクがあるでしょう、ドレンコックを開いたらどうですか」
横から加瀬君が計器盤を指差した。

「予備タンクの使用は法律で決まっており、緊急時以外は使用することは出来ない」

「それなら無線を打って。正夫達を発見したと。対策本部に連絡して本格的な探索機を出動してもらって。位置はGPSで割り出せるわ」

「もし発見が誤報でしたら正夫君の搜索は致命的なダメージを受けます。それでもよろしいか」

サチ子はたじろいた。

「もし誤報だったら」

その先の言葉が出てこない。

「この高度からでは、船が黒点のように見える事がありますが、海に浮かぶ人の頭までは無理です。何かの見間違いでしょう」

理論的であった。反論できずにいるサチ子に、パイロットは説得するかのように自信ありげに話を続ける。

サチ子は決断しなければならなかった。

理路整然とした理性か、それとも五感を研ぎ澄ます感性か。何を根拠に決断すれば良いのだ、正夫の生命が掛かっていると思うと決断できない。

サチ子は目を瞑った。

そして目を開いて決断した。

後悔はしない、仮に結果が凶と出ても重い十字架を背負って生きていく。

パイロットは対策本部に無線を入れた。

決断は競い合った善である

結果は人智を超えた神仏の膝元にあり
それを受け入れる勇氣と覚悟が出来た時
人は決断し道は開ける
つまり、迷い
それは美しく競い合う善である

生還4

対策本部へ帰ると探索機から連絡が入った。

「現場海域に到着したが霧が深くて目視探索が不可能、レーダ探索に切り替える」

「どうかレーダに映ってください」

サチ子は聖母マリアに祈った。

対策本部も水を打った静けさで、皆、柱にくくり付けられたスピーカーを見つめている。長い、あまりにも長い時間が経過して、突然スピーカーに雑音が入った。

そして、「レーダに反応あり、高度を下げて確認します」

続いて、「釣り舟発見。ヒト・マル・ヒト・号、二名の生存者確認」

対策本部は、このドラマチックな展開に沸いた。

対策本部長は、大声で「救援へり出動。遭難者を吊り上げて救助するのだ、急げ」と顔を真っ赤にして怒鳴った。

この知らせはすぐさま南の海上を搜索している作蔵達にも伝えられた。

「末男は無事だったか、そうか。皆の衆、港へ帰ろう。大漁旗を掲げてくれ」

興運丸は先頭に立ち、見た目にも派手な大漁旗をはためかせ、船団は皆白波を蹴立てて盛大に海上パレードをしながら帰港した。

玄さんは砂浜に跪き、何やら呟いた後、沖に向かって大声で叫び始めた。

「出てこいドビー、お前は失敗した。正夫は一〇二号には乗っていなかったのだ。お前が気付いた時には正夫達は危険水域を脱していた。慌てたお前はガスで隠そうとしたが、それもサチに見破られた。お前の完全な敗北だ。もう俺の前に出ては来られまい。言い分があ

ったら言ってみろ、お前なんかどこかへ行ってしまう、二度と俺の前に現れるな」

玄さんは両手を天空高く掲げ、硬直したままその場で失神してしまった。

「サチ子さん、早く来て」

加瀬君がテレビの前で叫んでいる。何事かとテレビを覗き見ると、あのパイロットがインタビューに応じていた。

「そうなんです、第一発見者は私なのです。いや、自分の口から言うのも変ですが、厳しい訓練を受けた優秀な男だけがパイロットになれるのです。ですからこの様な事は簡単な事で、取り立てて騒ぐほどの事ではありません。エー、警察署長が表彰してくれるのですか。エヘッ、金一封はありますかね」

サチ子は口に含んだビールを『ブー』と吹き出し加瀬君と一緒に抱腹絶倒、お腹を抱えて転げ回ってしまった。正夫の母は狐に取り付かれたかのようにピョンピョン跳ねまわっている。サチ子が見る限りここには正常な人間は一人としていない、皆狂っている。

救援ヘリが帰ってくるぞーという声に、皆は砂浜に飛び出した。東の空から現れた救援ヘリ二機は、サチ子たちの頭上を旋回してヘリポートに向かった。窓には正夫の顔があった。

斯^{かく}して正夫、生還す。

窓から外を眺めると、紫外線の強い日差しが降り注いでいる。

あれから一週間が経って、正夫の母から大きな宅配便が届いた。中には一通の礼状と沢山のアジの開きが入っている。

「前略、加瀬さんから真実を聞きました。正夫を取り戻していただきありがとうございます、お礼の言葉ありません。玄さんも『サチ子さんが正夫のお嫁さんになってくれたなら』と残念そうに申しております。

地元で取れたアジの開きを少しですが送ります。ご笑納ください。かしこ」

玄さんとの別れ際、サチ子は「魔物ドビーは怎么样了かしら」と尋ねた。

玄さんは眩しそうに沖を見つめて、「俺達には始まりと終わりがあるが、あいっにはそれが無い。きっと何処かにいるずら」と力なく笑った。

サチ子は正夫にもらったCDを聴きながら、特産のアジの開きを焼いた。

部屋中に香ばしい匂いが漂って、こいつを突きながらビールを片手に原稿を書き始めた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4106t/>

サチ子の日記 【モンスター・ドビー】

2011年8月27日10時29分発行